

## 平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

### 1. 学校概要

学校名 広島市立大林小学校 (※正式名称を記載)  
種 別 ☐ 保育園・幼稚園 ☒ 小学校 ☐ 小中一貫<sup>※注 1</sup>  
☐ 中学校 ☐ 中高一貫<sup>※注 2</sup> ☐ 高等学校  
☐ 教員養成大学 ☐ 専修学校、各種学校  
☐ 特別支援学校  
☐ その他（例：小中高一貫）  
※注 1 義務教育学校を含む ※注 2 中等教育学校を含む  
所在地 〒731-0221 広島市安佐北区大林四丁目 1 4 番 1 号  
E-mail [oobayasi@e.city.hiroshima.jp](mailto:oobayasi@e.city.hiroshima.jp)  
Website <http://www.ohbayashi-e.edu.city.hiroshima.jp>  
幼児児童生徒数 男子 34 名 女子 41 名 合計 75 名  
幼児・児童・生徒の年齢 6 歳～12 歳

### 2. 報告期間

平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月

### 3. 活動内容

#### (1) 活動の概要

本校は、本学習活動を「ホタルプロジェクト」と名付け、生活科や総合的な学習の時間を中心に、理科や社会科など教科横断的な学習計画を行い、ESD の取組として学習活動を行っている。地域の自然保護に関わる学びを中心課題として取り組みながら、地域社会と連携を図り、全ての児童が郷土を愛し文化や伝統を継承しながら、地域と結びついた幸福で豊かな社会を築く力を育むことを目標として取り組んでいる。

このようにして育まれた資質・能力は、地域社会を支えると共に、ひいては社会全体につながり、よりより人々の暮らしへと広がると考える。したがって、この取組の根底には ESD の考え方が深く流れている。

平成 22 年より改善をはかりながら、本校は実践を重ねてきた。具体的には、①ホタル（幼虫）の飼育及び放流活動、②地域の自然環境保護活動、合わせて③地域の人々の暮らしと自然に関する活動 ④地域の歴史や産業と史跡文化を理解する活動を中心に学習活動を行った。当然のことながら、これらの学習活動は相互に関連している。

#### ①ホタル（幼虫）の飼育及び放流活動

「ホタルがいっぱいになる大林地域にしたい。」という児童の願いを中心に学習活動が展開された。これまで、学習の繰り返しである程度のサイクルができあ

がっている。ホタルの成虫の観察。採卵・孵化した幼虫の飼育、そして、幼虫の放流と1年間を通した活動となっている。

6月の第1土曜日に「ホタルのタベ」と題した会を開催し、ホタルに関する学びや関連したものの製作、準備を行い、会では保護者、地域の方を招いて取組を発表した。

## ②地域の自然環境保護活動

「ホタルプロジェクト」の学びが次第に大林地域の自然環境理解と保全等に広がりを持ち具体的な学習活動として、大林連合自治会や太田川漁協の協力を得て、アユの稚魚を全児童で根の谷川へ放流した。地元を流れる清流が豊かな恵みをもたらすことを願ったり、そのために自分たちができることを考え実践したりする学習活動となった。

## ③地域の人々の暮らしと自然に関する活動

平成26年8月20日未明に起きた広島土砂災害の被災地にある本校は、オリジナルストーリーで絵本の制作を行った。それをもとに6年生が大型紙芝居にしている。この作品を活用して、入学してきた1年生に読み聞かせを行った。大林小学校で、どんな取り組みをしているのかや大林地域で起きた災害の伝承と共に、ホタルや自然を大切にしていかなければならないことを1年生に伝えることを継続的に行っている。

## ④地域の歴史や産業と史跡文化を理解する活動

地域の農作物栽培として地域の方と共にコンニャク栽培からコンニャクづくりを行った。また、ゲストティーチャーとしてお招きした地域の方々との交流を通して、地域で育つ喜びや有用感を感じる取り組みとなった。

地域の方々と交えたもちつき大会では、大鍋で作られる豚汁の材料として6年生が作ったコンニャクを使い、全校児童と共に保護者、地域の方々にふるまわれた。児童が作ったコンニャク入りの豚汁は、地域の方々や保護者にたいへん好評であった。そのほか、地域の史跡を巡る学びを地域の方を招いて行った。

### ①ホタル幼虫の放流会



### ③自作紙芝居の読み聞かせ



### ②アユ稚魚の放流活動



### ④コンニャクイモの植え付け



## 2) 活動の詳細

### ○活動内容 (年間の取組)

4月 大麦の栽培(前年度からの継続活動)

5月 紙芝居の上演(6年生→1年生)

ホタルについての学習(1・2年生)

根の谷川へアユの放流 ※大林連合自治会・太田川漁協の支援

コンニャクイモの植え付け ※大林地域悦寿会(老人会)の支援

ホタルの観察・産卵・・・採卵開始 ※ホタル採取はPTA会員の支援

ホタルかごづくり(5・6年生)

※大林社会福祉協議会会員の支援

風鈴づくり(4年生) ※PTAの方々の支援

6月 麦茶づくり(1～3年生)

大麦の刈り入れ(2～3年生)

ホタルのタベ開催(全学年)

ホタルの幼虫の飼育開始(3・4年生)

7月 根の谷川あゆのつかみどり(PTA主催行事)

9月 根の谷川の生き物を探そう(1・2年生)

10月 下水道教室(4年生)

地域清掃活動(全学年)

虫取り(2年生・3年生)

幼虫飼育の引き継ぎ(なかよし班活動)

※なかよし班→学年縦割り班

(以後、なかよし班によるホタルの飼育活動)

11月 幼虫の飼育活動

コンニャクイモの堀上げ(6年生)

12月 麦の種まき(1～2年生)

谷川へ幼虫を放流(3年生)

1月 ホタルの幼虫観察会

コンニャクづくり(6年生)

もちつき大会(全学年)

麦ふみ(1・2年生)

2月 ビオトープへ幼虫の放流

大林史跡散策コース巡り(3年生)

3月 大林散策コーススタンプラリー(地域行事)



### ○主な取組について

#### ◎ホタルの幼虫飼育と放流

ホタルの幼虫飼育は、採卵からしばらくは3・4年生が担当し、11月ころから放流まで、なかよし班(1年生から6年生までの縦割り班)が順番に当番となって飼育活動を行う。

6月上旬の「ホタルのタベ」と名付けた発表会では、1年間に学んだことの発表や会に来校された地域・保護者の方をもてなす用意をする。学年で分担し、学習を深める。地域の方をゲストティーチャーに迎え、大麦の茎で作るホタルかごの作成



(ほたるのタベ)



や学区にあるガラス工場関連の素材での風鈴づくり、前年度にとれた大麦を使った麦茶づくり、ホタルの絵を配したうちわづくりを行うことが主な取組となっている。



#### ◎根の谷川へアユの放流 全学年

大林地域の自然環境理解と保全を考える機会として大林連合自治会や太田川漁協のご協力を得て、アユの稚魚を全児童で根の谷川へ放流した。地元を流れる清流が豊かな恵みをもたらすことを願い、また、そのために環境を守ることを心に刻みながらの活動となった。

#### ◎コンニャクイモの栽培ともちつき大会

自然環境の恵みである農作物の栽培として6年生は地域の方と共にコンニャク栽培からコンニャクづくりを行った。コンニャクイモからコンニャクをどのようにして作るのかを体験しながら知ると共に、ゲストティーチャーとしてお招きした地域の方々との交流を通して、地域で育つ喜びを感じる取り組みとなっている。



コンニャクづくりの後、1月末に行われるもちつき大会では、大鍋で作られる豚汁の材料として6年生が作ったコンニャクを使い、全校児童と共に保護者、地域の方々にふるまわれる。児童が作ったコンニャク入りの豚汁は、地域の方々や保護者にたいへん好評である。

#### ◎お話作りと読み聞かせ

※「ヤクソク」と題したホタルのお話

平成27年度に制作したオリジナルストーリーを現6年生が4年生時に大型紙芝居にしている。この作品を活用して、入学してきた1年生に読み聞かせを行った。大林小学校で、どんな取り組みをしているのかや、ホタルや自然を大切にしていかなければならないことを1年生に伝えることを継続的に行っている。最高学年となった6年生児童にとっても、制作した紙芝居を発表する場やこれからも継続してホタルの飼育に取り組む気持ちを高める機会とすることができた。



#### ◎小川への幼虫の放流(3年生)

3年生が育てていたホタルの幼虫を、来年の夏に羽化することを願って地域の小川に放流をした。平成26年8月20日未明に広島市をおそった豪雨により大林地域の多くの谷川では土砂が流出し、それ以後、少しずつ回復してきているものの、生き物の住める環境は大きく損なわれている。ホタルの飛び交う故郷を願い、3年生が地域の人と選んだこの場所に幼虫を放流した。





### ◎地域清掃活動 全学年

全学年児童が学校を中心とした大林小学区を分担して、清掃活動に取り組んでいる。日頃、通学路を通ったり、遊んだりしている場所を、自らの手できれいにすることを通して、自分たちの住む大林をきれいに、住みよい場所として維持しようとしている。ホタルを中心とした生き物の生育環境の整備も意識しながら、行った。



### ◎大林地域散策コース巡り 3年生

1年間に実施した地域に関わる学習活動は、大林社会福祉協議会や長寿会の方々などの地域の方々に支援をしていただき、行った。



### ○終わりに

「故郷『大林』をホタルの飛び交う自然豊かな町として大切にしよう。」「そのために、私たちは何ができるか、何をするか。」と考え、ホタルプロジェクトの学習活動が展開されてきた。児童の実態に即し、自分で見いだした課題を自分なりに考えたり、グループでまとめたりしながら、一つの目標に向かって学校の児童全体が取り組むことのできるテーマであった。学年や児童の発達段階に応じて課題を設定することができ、その課題を様々な手立てで解決し、自分たちなりの結論を導いてまとめに達することができたと考える。

「ホタルプロジェクト」は、ホタルの羽化時期を選んで行われる6月始めの「ホタルのタベ」が活動の一つのまとめの場となる。同時に採卵や幼虫の飼育活動も始まる。また、大麦栽培は、11月頃に播種し、6月頃に刈り取り、その後乾燥、脱穀と続き、前年度収穫した大麦の茎でホタルかごを作ること、大麦でホタルのタベの来場者に配る麦茶づくりを行う。コンニャクイモ栽培は、1月末のもちつき大会で作られる豚汁の食材として、地域と連携し児童が栽培とコンニャクづくりに取り組んだ。



どの学習素材も常に次の見通しと目的をもって行われ、それぞれの場で工夫や課題解決のための取組が行われる。このように学びが循環し継続し、深化発展することが期待できる。そして、児童が地域でよりよい暮らし方を追究する取組が伝統文化や地域の人々と結びつき、豊かな学びとなっている。

「課題解決型の学習」であり、児童の意識、助言者である教師の高い意識が必要である場面がある。豊かな学びの活動に高めるためには、指導者の ESD や自然保護に関わる意識を高めていく必要があり、これからの課題である。また、児童の学習への動機付けや今後の発展を願うには、児童の主体的な学びへと転換させていくことが必要不可欠である。

ア. 活動分野（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 環境	<input type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input type="checkbox"/> 3. 防災	<input type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input checked="" type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input checked="" type="checkbox"/> 10. 食育	<input type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他( )		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力（複数選択可）

<input type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入 )	

ウ. 活動時間（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input checked="" type="checkbox"/> 5. その他(自由記述 学校行事・地域行事 )	

エ. 使用した教材（書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名）

- ① ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

※チェック事項 1-2, 1-3 に対応

主に1, 2年生は、生活科、3年生以上は総合的な学習の年間計画に位置づけている。児童が本地域に学び、育つ中で疑問に感じたことを大切にしながら重ねてきた「ホタルプロジェクト」の中に組み込む工夫している。

また、発表や文章の作成など国語科の単元と教科横断的に位置づけることを年間計画の中で各学年が考え、具体的な取組を進めている。



- ② 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。(200字程度)

※チェック事項 1-4 に対応

学習活動を集約する公務分掌（教務部）に担当者を位置づけ、全学年の取組が計画的に進むよう年間計画を見直したり、提示した入りしている。担当者が学習活動全体を調整していることから、スムーズな学習活動を行うことができている。

- ③ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。(200字程度)

※チェック事項 1-5 に対応

「『ホタルプロジェクト』にESDの視点を取り入れプロジェクト型の学習の実践を充実させ課題解決能力を高める。」として、地域と連携した学習活動を効果的に取り入れることを学校全体の目標としている。取組評価の方法は、児童の記録物等からの読み取り、実践の回数、教科横断的な学習計画による取組の回数の変移とした。児童は主体的な学びにつながる疑問や改善策を考え取り組む姿が見られるようになり、地域との連携にチャレンジし取り組む回数も増えている。課題としては内容の充実度を上げることである。

- ④ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。(200字程度)

※チェック事項 2-2 に対応

ホタルプロジェクトは、本校の取組として日常化している。その取組の様子を学校ホームページに公開している。他校や地域、保護者から時折、感想が学校に伝わってくる。おおむね、励みとなるものであり、今後の取組の活力としていきたい。

- ⑤ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成（地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など）(200字程度)

※チェック事項 2-3 に対応

特に地域の各団体との連携を密にして学習活動を計画実施した。教育関係団体との連携はほとんど行っていない。

⑥ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成（２００字程度）

※チェック事項 2-4 に対応

他のユネスコスクールとの交流やネットワーク形成は行っていない。

⑦ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（２００字程度）

※チェック事項 2-5 に対応

児童の課題を見出す場面や解決に向かう姿勢などに主体性が見られ、力が伸びている。また、教員においては、課題を児童から見出し設定すること、教科横断的な学習計画の視点を持つことからカリキュラムに対しする視点が広がり、指導力の向上につながっている。

児童の主体的な学びをどのように行うか、これから求められる資質能力の育成に向けて、学校での児童の学びについて理解が深まる場面が多くあった。

（３）平成 30 年度の活動計画（２００～４００字程度）

本校のプロジェクト方の学習は、年度ごとに終了する火プログラムではない。児童は、継続して課題に取り組み、学年が上がっていけば、それに応じた取組を行う。したがって、現時点では、今年度の取組を継続し、生じる課題をまた解決したり、学びを深めたりしていくことが、次年度につながって行うことである。

１年を通じてみれば、６月始めたの「ホタルのタベ」が一つの区切りとなっている感がある。会の全体像も含め、新年度の方向性も振り返りの時間を持ちながら、検討し取組を進めていく。

また、次年度においても学校経営目標の一つに位置づけ、学校全体をあげて取組を推進していく。